



179号
2012/ 12/1

日中文化交流市民サークル'わんりい'
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
◆'わんりい' HPのアドレスが上記になりました。



女王谷の美人コンテスト・二次審査の顔見せ

撮影年月：2012年10月

撮影：大川健三

'わんりい' 179号の主な目次

北京雑感(70)湿度	2
私の調べた諺・慣用句(15)「老いて益々盛ん」	3
媛媛讲故事(49)「土中に隠したお金」Ⅳ	4
中国-城市めぐり(20)「成都市・そのⅣ」	6
四姑娘山写真だより(28)女王谷の美人コンテスト	9
「四姑娘山・写真だより」の里を訪ねて⑤両河郷、開かずの宿	10
モンゴル滞在日記Ⅲ	12
スリランカ紹介(63)「スリランカ人の物差し」Ⅲ	14
私の四川省ひとり旅(60)/4度目の康定でⅢ	16
アジア映画鑑賞⑤香港映画「桃さんの幸せ」	18
【智子の雑記帳】(88)「災害時の気持ちの備え」	19
松本杏花さんの俳句集「千里同風」より	19
留学生たちの広場・東北被災地支援のボランティア	20
「中国の笑い話④」	21
'わんりい' 掲示板	21



表彰者の合同写真

【表紙写真説明】中国四川省カンゼ・チベット族自治州丹巴県で恒例の「風情節」のお祭が行われ、これもまた「風情節」恒例の美人コンテストが開催された。

(詳細説明：9ページ)

一年がたつのは早いもので、2012年も、もう12月。ちょっと早いようですが、今年を振り返ってみると、夏の暑さが印象に残ります。寒さが身に凍みるようになった昨日今日でも、思い出すとため息の出るような暑さでした。私の周りでも、暑さに体調を崩した方が多くいらっしゃいました。そんな話をすると、周りからは、歳のせいだと片付けられていましたが、秋の収穫物の中にも、「夏の暑さのせいで今年是不作」と言うものが沢山あるようで、そんなニュースを聞くと、「我が意を得たり」と思うのでした。

今年、私は珍しく中国以外の国へ出かけました。4月にタイのバンコクで5日ほどを過ごしたのですが、タイは3、4月が一番暑い時期だそうで、皆から、何でこの時期に？ といわれました。その暑いバンコクで、おまけにゴルフ場で下手なゴルフを楽しんで来ました。バンコクは確かに暑いことは暑かったですが、東京にいるより身体の消耗度は少なかったように感じました。

また8月末には、北京から遥か南の深圳へ出かけました。これも、何でこの時期に？ といわれましたし、緯度的にも随分南ですから、暑さを覚悟していたのですが、私個人的には、余り酷い暑さは感じませんでした。東京にいるより楽だったような気がしました。旅行中で、ちょっと気を張っているの、酷い暑さを感じなかったの、という見方もありますが、私には、暑さの質が違うように感じられました。日本では、一度汗をかくと、汗がいつまでも身体にまとわりついている感じですが、バンコクも、深圳も、また北京も、暑さは相当厳しく、汗が吹き出てきますが、いつまでもベタベタしていることは無いように感じました。

この違いは何処から来るのでしょうか？ 本来ですと、各地の気候を数字の上で調べて比較するのですが、不勉強な私はそうしないで、自分の身体で感じたままに、湿度の違いではないかと考えています。そう考えると、北京での体験でガッテンできることが幾つか出てきます。

北京の生活で、不思議に思ったのは、食べ物が腐ると言うことが極端に少なかったことです。夏場、日本ではちょっと油断して台所に出しっぱなしにした食べ物は、すぐ傷んでしまいますけれど、同じような状況

でも、北京では、(勿論、食べ物の種類にもよりますが)傷んで駄目になってしまったと言うことが殆ど無かったと思います。そのせいか、北京の人々は、時間が経った食べ物でも余りにせず食べてしまいます。一度、北京の人々と一緒に団体旅行をしたことがあるのですが、中国の人々は、バスの中で配られたサンドイッチを食べ切れなかった時、時間が大分経ってから、残りを食べていました。我々は、食べたいけれど、時間が経ってしまっているのが傷んでいないか心配で、臭いを嗅いだり、ちょっと舐めてみたりと恐る恐る味見をしますが、中国の方々は、そんな心配はまったくしていませんでした。日常生活の中で、ものが腐るということを余り経験していないようです。

皆さんは、中国で食堂に入った時、余分な茶碗や皿を頼んで濡れた茶碗や皿を持ってこられた経験はありませんか？ 格式の高いレストランでは違うのですが、街角の食堂と言ったランクの店では、しばしば経験しました。初めは、忙しいので拭くのを省いて持ってきたのだらうと思っていたのですが、よく観察してみると、食器は洗った後拭かずに食器棚に積み重ねていました。あんな手抜きをして、不衛生ではないかと思いましたが、実は、家庭でも洗った食器を拭く習慣はありませんでした。洗って水切り籠等に暫く置くと、まだ糸じりに水が残っていても、そのまま食器棚に収納します。台所には、台布巾はあっても、食器を拭く布巾はありませんでした。それでも食器を次に使うときにはすっかり乾いていて、何の支障もありませんでした。これは北京の空気が乾燥しているからだと後で気がつきました。

中国の友人は、日本に長く生活して、日本のお風呂が大好きになりました。それでマンションを購入した時、日本式の風呂を取り付けました。小判型の木の桶で踏み台をつけて入るタイプの、懐かしい風呂桶でした。2,3回はご機嫌で使用していたのですが、彼は他にも家があるので、そのマンションを3か月ほど留守にすると、風呂桶から水が漏れるようになりました。更に2,3か月留守にすると、次に帰った時には、箍が外れて桶はバラバラになっていました。日本では考えられないことですが、これも北京の乾燥のせいでしょう。

老いて益々盛ん

私の調べた諺・慣用句 15

三澤 統

以前、金さん銀さんという大変元気な人気者のお婆ちゃん姉妹がおりましたが、その銀さんの娘さんたちの四人姉妹がいてテレビに出演していました。四人の平均年齢はなんと92歳ということですが、皆さんともに呆けもせず、大変活発な様子でした。

また、前都知事の石原氏はもう80歳ですが、新党を結成して日本を改革しようと頑張っています。身近な一般の人たちも70代80代の年配者たちが、いろんな趣味や生涯学習に積極的に参加して、皆さんそれぞれ元気に余生を送っておられます。まさに

に「老いて益々盛ん」というところです。

そこで、今回はこの「老いて益々盛ん」を慣用句として取り上げてみました。これは人が心ならずも貧乏な環境におかれたり、年をとってからの心構えを示した、大変含蓄のある、中国のお話が基になっています。

辞書では次のように載っています。

▲インターネット Goo 辞書：

「老いては益々壮なるべし〈後漢書¹⁾、馬援伝〉から年老いても元気が衰えず、ますます盛んな意気がなければならないということ」

▲小学館中日辞典：

「老当益壮 lǎo dāng yì zuàng 老いてますます盛んである」

この成語の由来は、「後漢書・馬援伝」です。

東漢の名将馬援²⁾は、小さい時から、北方へ行って牧畜をしたいと望んでいました。彼は成長してから扶風郡の督郵(監察役)になりました。

有る時彼は郡太守の指示で、さる事件の犯人を長安まで護送することになりましたが、護送の途中で犯人のあわれな様を見て同情心が働き、犯人を逃がして刑罰の苦を免じてやり、そのため自分が官位を失っても仕方がないと考えて、北朝郡まで逃げて隠れました。

ところがこの時都合よく大赦があり、馬援も犯人を逃がした罪を追及されないことになりました。それで彼は安心して念願の牧畜と農業をすることができるようになりました。

何年も経たないうちに馬援は大牧場主と地主になり、牛や羊を何千頭も持ち、食糧も何万石も持つようになりました。でもそのような富裕な生活は彼の本来の目標ではありませんでした。彼は裕福になって考えたことは、苦勞して蓄えた財産や牛、羊を自分一個人が享受するのではなく、それらを彼の兄弟や友人に分けてあげようということでした。

彼は有意義なことをしたいし、価値のある人になりたかったのです。彼はいつも友人や周囲の人たちに次のように言うておりました。

「一個人が守銭奴になるのではつまらな過ぎるよ」

「真の一人前の男とは、貧窮すればますます志を固くすべきであり、老いては益々志を盛んにすることだよ」

後に馬援は光武帝に仕え、戦に従軍し、光武帝のために輝かしい戦功を打ち立て、歴史上有名な将校となりました。

〈注記〉

1) 後漢書^{ごかんじょ}：中国、後漢時代を記した歴史書。正史の一つ。全120巻あり、そのうち本紀10巻、列伝80巻は范曄^{はんよう}(398～445)の撰である。

(Yahoo! 百科事典より)

2) 馬援^{ばえん}(紀元前14年～49年)は中国新末期から後漢初期の武将。子孫に後漢末期・三国時代に活躍した馬騰・馬超親子がいる。

(ウィキペディアより)

【関つづし】

私が小学校時代は太平洋戦争の真ただ中だった。小学校時代に学んだ日本史は、神代の物語から始まった。イザナギ、イザナミの両神が結婚し、ドロドロしたカオスの海から日本列島を次々に生み出した後、天照大神、素戔嗚尊、大国主命、タジカラオノミコト、アメノウズメノミコト、海彦山彦等々、数えきれない多くの神々が教科書に登場した。

そんな歴史を学んで来たが、高校時代になって「日本史」を選択し、歴史資料をまとめた副読本で、「魏志倭人伝」を知った。初めて、資料に裏付けられた世界史の中の日本に接し衝撃を受けた。「魏志」は中国の歴史書・「三国志」の「魏国」についての記述をまとめたものだが、今回、後漢書の検索をしている内に、後漢書東夷伝・倭として同様な記述があることを知った。世界史の脚光はまだ届かないながら、幼い国として纏まりつつあった頃の倭国が、何故かとてもいとおしく感じられる。

(田井)

旅の疲れで体調を崩した妻を無料で診察して貰い、薬もただで貰うことができた周秀才は、「良い医者に巡り合えて、本当によかった。有り難うございました」と感謝の言葉を繰り返し述べました。

医者は

「いや、この薬局の主人の指示で、貧しい人には診療費、薬費などは不要にしているのです」

と答えました。

周秀才と妻の二人が感謝を繰り返しているところへ、奥の部屋から男が出て来ました。医者は

「こちらがこの薬局の主人です」

「あ、どうも大変お世話になりました。感謝の気持ちで一杯です」

周秀才夫婦は、慌てて頭を下げてお礼の言葉を述べました。

薬局の主人は玄関の看板を指して

「いいんですよ。元気になれて何よりです。これからはこの看板の名前を覚えて何時でも必要があれば来てくれれば良いのです」

夫婦二人がもう一度玄関の上に掲げている看板を見ると、「陳記薬局」と書かれています。周秀才は再び主人の顔をじっと見つめると、なんとなくどこかで会ったような気がしてきました。

「お顔をどこかでお見掛けしたような気がしますが、十何年前にこの町に住んでいた陳徳甫という方で存知でいらっしゃいますか？」

「ええ、私とその陳徳甫というものです」

「それはそれは！私は周秀才です！覚えていらっしゃいますか？」

今度は主人が驚いて、夫婦をじいっと暫く見つめていました。

「え！周秀才ですって？ えー、あ、そうです、そうです。思い出しました。私が預かったあの長寿のご両親じゃないですか？」

「そうです！そうですよ!!」

周秀才夫婦は、嬉しさのあまり泣き出しそうにな

りながらただただ頷きました。主人は夫婦を茶の間に連れて行きお茶を出し、気を落ち着かせてから訊きました。

「どこからいらっしゃったのですか？どこにいていましたか？」

「話はとても長くて一度には話せませんが、まずは長寿の話をお聞きしたいのですが」

「長寿はね、もう立派に一人前の男になりましたよ。養母も養父も亡くなり、家業を継ぎましたが、養父と違って、お金をそんなに重要なものに思わないようで、いつも気前よく大金をあちこちに撒き散らして、人を助けているのですよ。実はこの無料の薬も、長寿の支援によって行ってきたのです…」

陳徳甫がいろいろ長寿の話が続けるのを、周秀才は遮って

「それでは、長寿に会えるでしょうか？実は歳を取るにつれて息子のことが懐かしくてたまりません。それで一目でも良いですから息子に会いたいと思って帰って来たのです」

と周秀才は切々と自分の気持ちを話しました。

「それはお易いことです。では今すぐ呼んで来ましょう。暫く待ってください」

と言うと、陳徳甫は部屋を出て行きました。

十何年間ずっと息子のことを心に掛けて、突然、長年の願いがもうすぐ実現するというので、夫婦はまるで夢の中にいるように感じ、わくわくと心落ち着かず待っていました。

陳徳甫は馬車を使い、大急ぎで長寿の家を訪ねました。顔を合わせるや、すぐ長寿の身の上話をしました。

賈仁の家に貰われたとき、長寿は既に七歳になって物心もついていたのですが、衣食の悩みがない日々を送っているうちに、何も考える必要のない生活に慣れて、自分の生い立ちなど深く考えないで過ごして来ました。時には、長寿の出生についての噂を聞いたこともありましたが、全く気にすること

もありませんでした。今、陳徳甫が話すのを聞いて、長寿は先ずは吃驚しましたが、少しずつ幼い頃の記憶が甦ってきました。そしてすぐさま陳徳甫について薬局に向かいました。

薬局に入り、周秀才夫婦と長寿が対面すると、お互いに驚き慌てました。四、五日前に「東岳廟」で出会っており、しかも祭を見る場所のことで言い争った事も思い出しました。

「あら、あなたが長寿？」

「え、なんと、これは父上と母上ですか？」

両方ともこれ以上何を言ったら良いのか、分らないまま、ただただ互いを見つめ合いました。

陳徳甫はそのやや気まずい雰囲気の中に割り込んで言いました。

「あらら、これはこれは。皆さんはどんなにかお喜びでしょう。では、親子でゆっくりお話ししてくださいよ」

そこで、親子三人は坐り直して、ゆっくりという話し始めました。泣いたり、笑ったり話は尽きません。語られる話はまるで芝居の中の出来事のようにでした。

話はいくら話しても尽きません。長寿は両親にこれからは一緒に住もうと勧めました。周夫婦は、突然のことで、心の準備がなく、どうしたら良いのか分かりません。

すぐに返事をしない両親を見て、長寿は両親が「東岳廟」のことで、まだ怒っているだろうと思いました。

「父上様、母上様、「東岳廟」のことは、私が悪かったです。私の家に是非来てください。今日が突然すぎてご無理でしたら、明日でも、あさってでも良いですから、私の家に来てください」

と言いながら、銀の塊を入れた箱を周秀才夫婦の前に押し出して、頭を下げて願いました。

「少額ですが私の気持ちを表したいのです。どうぞお収め頂けますようお願いします」

夫婦は要らないと辞退を繰り返してしていると、箱の中の銀の塊が転がり出ました。そして銀貨にはなんと「周奉記」という文字が刻ざまれていること

に気付きました。

「え!“周奉”だって？ ならそれは私のお金じゃないか！」

薬局の主人は吃驚して訊ねました。

「なんでそう言う話をされるのですか？」

「私の祖父が「周奉」というのです」

「でも、賈仁の家のお金には間違いがないだろう？ 名前の同じ人がいるから、どこからか入ってきたお金かもしれないですね」

そこで、周秀才は昔お金を庭の土壁の下に埋めて上京し、帰って見ると土壁も金も全部を失ってしまったことを一部始終、細かく話しました。全てを聞いて、薬局の主人はなにもかもはっきり分かりました。

「そうか、判ったぞ！ 間違いなくあなた様のお金ですよ。奇跡です！ 自分のものが最終的に自分の元に戻って来たのです。神様が見守っているのでしょうか」

と考え深く言いました。そして、

「賈仁は元々は貧乏な壁作り人でしたが、ある時から急に羽振りが良くなり、それから相ついで新しい商売を始め、二、三年間で地元でも有数の富豪になりました。町の人々も皆不思議に思っていたのですが、盗んだお金を使っていたとは誰も気付かませんでした。しかし、神様は善悪をご覧になっていらっしゃるのですね。神様の計らいで、賈仁は子供に恵まれなかったので、長寿を引き取って育て、結局そのお金はあなたの家に返って来ました。なんとという奇妙な物語でしょう」

この時、長寿も感慨深く言いました。

「そうだ。養父の賈仁は日頃から、大変けちで、お金を惜しんであまり使わなかった。なんだ、私たちの為にお金を使わないようにしていたのではないか。父上、母上、賈仁が残したお金はご自分たちのお金ですから、これからは自由に使ってください」

周秀才一家は長い離散を遂に終えて、家族寄り添い団らんできるようになり、幸せな生活を送るようになったということです。

(この項終り)

私の「都市巡り」で現在連載している成都市が、短い旅であったにもかかわらず4回も続くとは当初は思いもよらなかった。まわり道をしたり脱線したりもしたが、長文になったのはやはり初めての地であった成都市の印象がとて強かったこと、そして王さんとの再会によるものと思う。見知らぬ土地に友人・知人がいることは旅に彩りを与えてくれるものである。成都市には実質3日間しか滞在しなかったわけだが、一週間以上滞在したような気分であった。



夜が明けて2月2日の朝を迎えた。天気が気になったので外を見ると、曇り空で中国特有の霧がかかったような遠くが見通せない空模様である。四川盆地は雨が多いと聞いてきたが、3日間とも傘をさすことはなかった。

レストランで朝食をとり、コーヒーを飲みながら一日の行動予定を立てた。まず向かった所はレトロな街並みで有名とガイドブックに紹介されている「寛窄巷子」(クワンザイシャンス)である。「寛」とは、広いという意味で、「窄」は狭いという意味である。「巷子」は路地とか横丁のことであるが、イメージはわからない。

北京の「胡同」も横丁と紹介されているので、そんな感じかなと思っていた。地図でよく見れば昨夜の地下鉄の駅「天府広場」から近いが、主としてタクシーで移動するので方向や距離感は全くわからない。タクシーといえば、この街は降りるときのおつりは必ずお札なのである。硬貨がなぜ使われないのであろう。友人に聞いても分からない。中国の紙幣はあまりきれいではないので私は硬貨でおつりをもらいたいのだが……。タクシーに限らずコインのおつりはついぞなかった。

さてこの寛窄巷子であるが、タクシーから降りてそこに立てられていた案内板を見ると、要は比較的広い通り(広いと言っても4メートルくらいの道幅)と狭い通りが直線的に2本並行している。長さは500メートルはあろうか。この一帯は約三百年前の清代に造られた古い街並みが残されたものと書いてあるが、近年モダンな雰囲気^{モダン}に手を加えられ若者好みの街となった。おしゃれなカフェやレストラン、小物を売ってい

る店等が奥まで続いている。勿論車は通行禁止で道路にテーブルや椅子が置かれ、何かを飲んだり食べたりしながら人々が談笑している。

日本人のようにただ談笑するのと違って、中国人は常に何か口を動かしながら喋っている。(これは私の偏見かも) さらに歩いていくと等身大の馬の銅像があったり、緑も適度にあって眺めているだけでも楽しい場所だ。北京の胡同とは全くちがった風景であった。

そのうち湯気^{湯気}がもうもうと立ち込めている店の前に来た。つい中にはいってみた。メニューを見てもよくわからないので店員を呼び、指さしてあれと同じものをくれと注文した。注文したのは本当においしそうなおはんと麺のセットである。ごはんはいくつかに切り分けたパイナップルの上におこわのようなごはんが載っているものだが、これが何とも言えずおいしい。ごはん^{ごはん}にパイナップルの味がしみ込んでいるが日本人の口にも合う。もうひとつの小ぶりの発泡スチロールの器には白い麺にねぎのようなものがかかっていたが、絶品でお代りをしてしまった。食べる時、麺上の青いものが香菜かと一瞬ひるんだがそうではなかった。ホテルで朝食を食べてまだ2時間くらいしかたっていないだったので満腹となった。レトロな通りは、これから行く武侯祠のそばの「錦里古街」も有名らしいが、そこは行かなかった。

寛窄巷子からまたタクシーに乗り、長年の夢であった「武侯祠」へ。この名は、諸葛亮のおくり名である「忠武侯」に由来する。面白いのはここには彼の主人であった劉備玄德も祀られている。君主と家臣を一緒に祀った中国では珍しい祠堂だそうだ。それはいいとしても君主より家臣の名前にしたのは、諸葛亮の人氣が如何に大きいかということか。

祠堂に入っていくと、入り口に近いほうから、蜀の初代皇帝である劉備玄德が祀られている「漢昭烈廟」、その奥が「武侯祠」、一番奥の「三義廟」という順に配置されている。武侯祠内は映画などでよく見る羽扇を持った孔明が安置され、左右に彼の息子と孫の像が控えている。孫を祀るより奥方^{おくがた}を祀るべきだと思うが、それは現代人の感覚なのか。漢昭烈廟は中央に劉

備、左右に關羽と張飛が置かれているのは理解できるが・・・。三義廟は、「桃園の誓い」で義兄弟となった劉備、關羽、張飛を祀る廟である。この廟を正面に見て、左奥に桃園の誓いの石像の置かれている広場がある。これは、「我ら生まれた日は違えども死すときは同じ日を願わん(不求同日生、只願同日死)」という義兄弟の契りを結ぶ三国志演義の名場面を再現している。周囲には桃の木が植えられていたが、私が行ったときは冬なので葉は落ちていて想像していた光景とは少し違った。

三人の石像の前は次々と観光客が来て、お互いに写真を撮ったりして大変な人気である。私も撮ってもらおうとしたが、我先にと順番などお構いなしの観光客ばかりなのであきらめて、少し離れたところにある「惠陵」に向かった。ここは劉備と彼の二人の夫人の陵墓で、周囲180メートルの円形のなかに高さ12メートルの盛り土をし、小山のようになっている。結構大きな木々が空に向かって伸びていたが、中国の皇帝の陵墓としては珍しいのではなからうか。

そこからまた漢昭烈廟に戻った。この建物の裏側の壁にある「出师表」を見るためだ。壁は横に長くそこに幅1メートル長さが10メートルくらいの黒い板の上にタテ書きでかかれていた。出师表とは、出陣の際臣下が君主に差し出す上奏文のことであるが、ここに掲げているのは魏に対し兵を挙げる諸葛亮が、劉備の息子の劉禪に差し出したもので、名文として世に名高い。

成都旅行から日本に戻ってある会合で中国の方と話す機会があり、出师表の話をする、諸葛亮が出した出师表は5～6通あるのだと教えてもらった。その中でここに掲げたものが一番有名ということなのか。どなたかにいつかこの名文について詳しく教えて欲しいものである。

武侯祠の観光ポイントは以上の通りであるが、まだまだ見るべきところも多い。成都に滞在の時間も限られているので最後にパンダを見に行くことにした。

市内中心部からタクシーに乗り30分余りで「成都大熊猫繁育研究基地」に着いた。パンダの保護と研究のための施設は、この基地および雅安と臥龍の三か所で2006

年に「四川省パンダ保護区群」として世界遺産に登録されたそうだ。ちなみに大熊猫はジャイアントパンダのことで、小熊猫はレッサーパンダである。いまではパンダと言えばジャイアントパンダを指すが、発見されるまではパンダと言えばレッサーパンダのことだったという。体が小ぶりなので〈lesser panda〉とネーミングされたい。前置きが長くなったが、入場口のすぐそばでタクシーから降りて入場券を買った。一人なぜか58元と半端な金額である。

中に入ると10人乗り程度の園内遊覧用の電気自動車に待っている。タダかと思っていると10元必要という。なんだかんだとよく金のかかることである。今の中国はどこに行っても、その辺の名もないような公園でも入場券を買わなければならないことが多い。あまり目くらまを立てるほどではないが、日本との物価水準を考えるととても高い。案内板を見ると基地内はかなり広そうなのでやむなく10元払って車に乗り込んだ。勿論歩いている人もいる。

車は右に左にカーブしながらずいぶん奥のほうまで



成都大熊猫繁育研究基地入场券



成都大熊猫繁育研究基地 <http://www.panda.org.cn/japan/about/gy1-1.asp> より

走り止まった。そこから歩いてすぐのところの大きな建物が建っていて、入るとパンダについてのいろいろな研究がなされているブースがいくつか仕切られていた。その前を通り過ぎると散策路に出た。

いるいる。どこかの動物園のように一頭とか二頭ではない。木に登っているのや歩き回っているのやら、かなりの頭数である。生まれてはじめてパンダを見たが、神様はよくこのような生き物をつくったものだと感心した。なぜ目の周りだけ黒いデザインを施したのであろう。上野動物園でも見ることができるとあるが、やはり広い園内でササが繁っている自然に近い環境の中で見ることができてよかったと思った。動物しかり古代の遺跡しかり、できることならもともとあった場所で見たいものである。ササばかり食べているせいか黄色色のバナナを大きくしたような排泄物がそこそこころがっている。水浴びなどしないのかどのパンダも薄汚れている。初めて見る前まではデパートなどで売っている真っ白なぬいぐるみをイメージしていたので落差を感じた。ガイドブックに赤ちゃんパンダの抱っこは5分1000元とあったが、やめにした。

散策路が長く伸び、しかもアップダウンがあっただけでさすがに疲労がたまってきた。歩く元気もなくなりまた電気自動車に乗り、入場口近くに戻った。そういえば四川大地震の時、ここのパンダはどうしたのであろうと思いつつ夕暮れの中ホテルに向かった。



濃密な成都での3日間がまたたくまに過ぎ去り、4日目の朝を迎えた。いつも思うのだが楽しい時、遊んでいるときの時間はどうして早く過ぎ去るのだろう。飛行機は現地時間9時35分発、NH0948便だ。8時には空港に着いたほうがいいので早めにチェックアウトする。フロントでチェックインした時にとられた押金(保証金)の1万円を返してもらい、「再見」と言ってホテルを後にした。空港の手続きはスムーズに終わり、待合室に入ったが人影が少ない。あとで空中小姐に聞くと搭乗者は15人だという。折角開設した路線がこれではANAも頭が痛いであろう。離陸した飛行機は偏西風にうまく乗ったのか、なんと3時間45分で成田空港に着陸した。あっという間の成都の旅であった。また是非機会をつくって訪問したい。

(この項終り)

【成都大熊猫繁育研究基地】

○目標：研究基地の目標は、成都パンダ基地が世界一流の絶滅危惧動物繁殖育成研究の中心になることです。

○簡単な紹介

成都パンダ繁殖育成研究基地（以下成都パンダ基地と略称）は、絶滅危惧野生動物に対して専門的に研究し、繁殖と育成、保護、教育をする非営利機関です。

成都パンダ基地は1987年に設立されました。設立時、保護のため捕獲した6頭のパンダの保護・育成から始まり、現在（2008年）に至るまでの間に、パンダの飼育数は83頭まで増加しました。

成都パンダ基地は、上記のような研究成果を上げつつ、パンダを初めとする絶滅危惧野生動物達が健康に成長するための保護と研究を続けています。この結果、85回に及ぶパンダの人口受精に成功し、124頭が誕生し、内88頭が無事生育しています。現在、83頭の飼育を続けながら、他のパンダ飼育機関に対する技術サポートとして専門家を派遣しています。また、各パンダ飼育機関と交流を密にして、情報を共有し、パンダの健康管理、飼育、繁殖と育成に協力するとともに、パンダ飼育の管理水準を高めています。

成都パンダ基地は敷地面積が106ヘクタールで、今後の工事の拡張によって、基地の面積は200ヘクタールまで拡大予定です。レッサー・パンダ、キンシコウ及びその他の絶滅危惧野生動物もここで繁殖及び保護活動を継続予定です。

(成都大熊猫繁育研究基地 <http://www.panda.org.cn/japan/about/gy1-1.asp> より抜粋)



今年の女王谷（現在ギャロンと呼ばれる地域のチベット語の原名“rGyalmorong”の意識）は異常気象で、例年9月初旬の雨季明けが10月中旬へずれ込みました。そのため丹巴で毎年10月末に開かれる風情節のお祭りが連日好天に恵まれました。この風情節のお祭りで最も脚光を浴びるのが「丹巴美人のコンテスト」です。古来から色々な部族が入り込んでいる丹巴は美人が多いことで有名で、その丹巴の美人コンテストと言う事で多くの観客が集まります。

初めにコンテストに申し込んだ参加者全員の顔見世行進が有り、一次審査が行われます。その後審査にパスした数十人が二次審査で自己紹介のスピーチ

と歌や踊り等の特技披露を行い、風情節の来賓の投票によって順位が決められ表彰されます。私が知るこの10数年の間でも時代の変化を感じていますが、伝統を重んじる丹巴の美人コンテストでも在り様が変わり、参加者の1/3が前衛的なコスチュームを着込んで特技披露していました。以下にコンテストのシーンをいくつか写真でご紹介します。

丹巴の美人コンテストの賞品は「金花1万元=1名、銀花8000元=2名、石榴花6000元=3名」だそうです。また丹巴の美人は芸達者が多く、美人コンテストでの評価に関係なく成都や他の都市で芸能活動をして高収入を得ている人が多いそうです。



参加者全員の顔見世行進



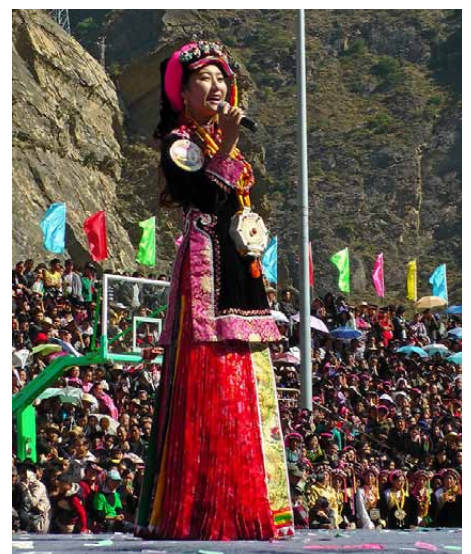
二次審査での特技披露(1)



二次審査でのスピーチ



二次審査での特技披露(2)



二次審査での特技披露(3)

●大川さんのホームページはこちら

- ▶ 蜀山女神、四姑娘 <http://www.rgyalmorong.com/scholaweb/conts.htm>
- ▶ ヒマラヤ横断山脈の女王谷 <http://www.rgyalmorong.com/index.htm>
- ▶ 四姑娘花図鑑 <http://www.rgyalmorong.com/scholaweb/flowers/flowerlist0-e.htm>

「四姑娘山・写真だより」の里を訪ねて—⑤ 両河郷、開かずの宿

佐々木健之

小金の街は、特に特徴的なところはなく、比較的小ざれいな街だった。

市場に行き、買い主の大川さんと我々やじ馬がぞろぞろと狭い通路を練り歩いた。買い物をしていると、時折オートバイが分け入って来るので、引っ掛けられぬようよける。大川さんは別の市場でスリの被害にあったこともありまったく油断がならない。仕入れは野菜が主でみずみずしい葉物や、果物を仕入れた。小金の街は丹巴より上流で、標高が約2,300mも有る。従って気温も低く6月中旬のこの時期では地場野菜は種類が限られるかな？ 売っている野菜の多くはもっと暖かい土地から運ばれたのだらうと思った。

買い物が済むと、3台の車を連ね67km先の両河郷へ向かった。両河についての予備知識はなく、知らないところへ行くのは楽しみだ。

谷間の道を進むので、未舗装の悪路かと思っていたが比較的程度の良い舗装道路が「両河」まで続いていた。おかげで適度にスピードが出せて、距離を稼ぐ。しかし公的施設の入り口があるところでは、車を強制的に減速させる鬼の洗濯板のような半障碍鉄板が敷設されており、減速しても丸太を踏み越えたような不快な振動があった。

夕方、明るいうちに両河郷に到着。2010年、大川さんが関根さんらを案内して来たとき(わんりい156号)と様変わりしていて、毛沢東らが率いる共産軍が1万2500kmを移動した「長征の観光地」に改造中だった。「両河郷」は1935年に「両河口会議」なるものを開いたところで、長征聖地として一旗揚げられるらしい。観光地として通用するように新しい「老街(古い街)」を造成中



小金の市場、名前は「繁栄市場」。



宿のテラスから南を望む。屋並みのほとんどは、工事中で営業していない。

であった。長征を確実に味わってもらうためか、街並みはずれの高みには白い毛沢東像が建っていた。主な建物は真新しい石畳の道に面して、ちょっと目には古い中国の街並みだ。

運転手らは、今夜泊まる予定の宿のありかを通りがかりの人に訊いてその宿に車を乗り付けた。真新しい看板を掲げていた3階建ての宿の名は「両河人家」。宿は以前からあった建物を改装して、いかにも中国の田舎屋の雰囲気を作っていた。けれども子細に観察すると向こう三軒両隣りとも、同じデザインの格子や、飾り物、外装の塗装も統一され、うさんくさく感じた。また、外装の格子や飾り付けは、ちゃちな材木で量産した物だった。

それでも即席景観地区の効果はあり、宿としてはおおむね快適であった。皆、車を降りてひとまず2階の談話室のような所に集まった。他の宿泊客は居ないので、2階と3階のどの部屋を使っても良いと知らされた。ご婦人方一同、子供のように無邪気に遊び、部屋定めに走った。

部屋によって、調度品やバスルームなどに格差があり、料金体系が違いうらしい。高級そうな部屋から順次塞がったが、赤を基調とした室内装飾と、赤いダブルベッドのある、特別料金を取られそうな新婚向きの部屋は希望者がなかった。

ツインの部屋を1人で使ったりして、贅沢な部屋割りであった。私と河本さんは売れ残りの3階の部屋に収まった。売れ残りでも、それなりに良かった。

「ただし田舎としては」の但し書きが必要である。



三階の私と、河本さんの部屋

まず給水のための水道がお粗末であった。各家々には、地下経由の水道管はない、あるいはあっても機能していない。ではどうするかというと、外の公道にある水道蛇口から、長いホースを家の一番高いところに引き込み、各部屋に分配していた。なぜそのような面倒なことをするのか、不思議だ。道路の蛇口から屋内に水を引けば、メーターを通さないでタダで使えるからか、などと文章を書きながらいい加減な想像をしている。ホースで引き込む仕掛けは、給水能力が劣るので3階にある私の部屋のように、洗面所の水が満足に出ないし、トイレの排水が弱々しく物体が流れない、という不具合がある。タンクが満杯にならないためか、タンクが無いのか忘れたが、流水不全を見越して、それ用の水を入れたポリバケツがバスルームの隅にあった。トイレの排水が不完全な場合はひしゃくで水で加勢するのだ。

そのポリバケツの水は、2・3階の踊り場にあるトイレの洗面所から宿の人が汲んでくる。宿の人が手抜きをした場合、客、すなわち私か河本さんが汲みに行く。

ある部屋は廊下側のドアノブが最初から折れていた。あっけなく折れたのは強度に問題がありそうだ。ドアノブがないと、部屋から外に出られるが部屋に入る



前ページの景色を撮ったテラス。奥が私と河本さんの部屋。外にある白い管が水道。提灯のところが、ドアが壊れた部屋。横の窓から入る。

ためには、かなりの力で折れたドアノブ軸を回転させる必要があった。私が試したところ、折れた軸をしっかり掴めないため開けなかった。その部屋には熟年のご婦人お一人なので、中にいる人に開けてもらうことはできない。解決案として、ドア横にある廊下の窓から窓枠を跨いで入ることになった。宿泊客は我々だけなので、保安上の問題は無かった。

築何十年の古宿なら、ドアノブが無くても驚かないが、昨日できたばかりのような真新しい部屋なのに、主要部品が壊れたママとは、旅館の経営者に同情してしまう。

旅館のそばに土産物屋があり、冷やかに覗いたら、旅館のあるじが店番で現れたので瞬時に空間移動ができるのかとちょっと驚いた。一生懸命の営業努力は伝わるが、人通りも希な村でやっていけるのかと思った。

夕食は宿から近い、料理店で摂った。持ち込んだ野菜を適当に使い、これという特徴もない食事であった。翌朝この店の前を通りかかると、道路から突き出た水道栓を使って洗い物をしていた。この家も水道水は外部の水道栓を使っているのだ。

翌朝早く、散歩に行こうと暗いうちにそっと部屋を出た。階段を下り、帳場に通じるドアの把手を握って押した。しかし開かない。懐中電灯で床下やドア上を照らして鍵とは別にかんぬきがあるのではと、様子を調べたがそういう物はない。単純にドアの鍵が施錠されて開かないようだ。なんだこれは、火事の際はどのようにするのだ。火事場のイメージが浮かび、逃げ場を失った我々グループの面々が開かないドアの前で、煙を吸って折り重なって倒れる図が脳裏をよぎった。

しかしすぐに現実の外に出るには、の問題に直面してこれは困った、大声を出して寝ている人を起こすのはまずいし…。いったん引き返して中庭に出ると、裏から出られないかを調べた。しかし、隣家との段差のある柵にふさがれていて、脱出できなかった。

ならばとさらに探ると、通りに面した隣家とのすきまに通路があり、外へ出られそうだ。ただし、道路へ出るところに高い木戸があった。懐中電灯を手元に近づくと木戸には丈夫そうなかんぬきがしっかり掛かっていた。よく時代劇などでお目に掛かる丈夫なやつだ。

では、乗り越えてしまおうと手をかけると、グラグラで壊れそうだし、横木が低い位置と高い位置の2個所だけなので、足を掛けられない。念のため再度、帳場に続くドアを試しに戻ったがやはりダメだった。

これでは散歩は諦めようか、だがもう一度開かないドアを精査しようと室内に戻った。

(続く)



7月11日(水)

ナーダムの3種競技は、相撲・競馬・弓射。きょうは朝から、そのひとつである競馬を見に出かけた。ツォゴウの母から借りたデールを着て、きょうも正装である。ナーダムの競馬の騎手は子どもだ。会場は市内から車で40分ほどの郊外。日本のような競馬場があるわけではなく、20kmくらいも離れたはるか遠くから、草原を一直線にゴール目指して走ってくる。

ツォゴウの父も馬主だ。彼の馬が出場する1回目の出走は朝8時半。迎えの車が遅れて、1回目は見られなかった。2回目まで3時間ほど時間があり、県のマークのついたテントで一休み。ホーショール(羊肉の揚げ餃子) やスーティー ツァイ(塩入りミルクティー) をご馳走になった。アイラグ(馬乳酒) も振る舞われる。

11時半出走の2回目の競馬をゴール近くで観戦した。モンゴル人は目が良いのか、遠く彼方のから走ってくるのが見えるようで、私にはまだ何も見えないうちから、もう彼らは浮足立って歓声があがる。子どもの競馬だから、それほどでもないと思っていたが、近くで見るとすごい迫力だ。

午後は前日行ったスタジアムに戻り、相撲の決勝戦と表彰式を見た。相撲と弓射の優勝者への賞品はオートバイだ。競馬の優勝者の子どもへの賞品は何だったかわからなかった。

ナーダム最終日の夜は、政府主催(?)のナーダム関係者のパーティに招待された。近隣国から、ホブドのナーダムに参加しているホーミーや馬頭琴演奏者、モンゴル相撲や弓射の優勝者が招かれた。私たちのテーブルには、キルギスタンからの人もいたので、ロシア語の通訳がついた。食事やスピーチやホーミーや馬頭琴演奏や記念品贈呈の後は、ダンスタイム。モンゴル人や近隣のロシア語圏(キルギスタンやカザフスタン等)の人たちが、こんなにもダンス好き

とは知らなかった。こちらではパーティにはダンスは付き物のようだ。Mも私も社交ダンスができない。何十年も前、ゴーゴーやツイストが流行っていたころを思いだして、私は隅っここのほうで、勝手に自己流のステップを踏んでごまかした。座っていると、女性が少ないからか、踊ろうと誘いがかかるのだ。

7月12日(木)

ホブドに来てから昨日までの4日間は、連日ナーダム見物を中心に、欲張ったスケジュールで、連日零時頃まで動きまわっていた。きょうは全日フリー。ゆっくり朝寝して、ゆっくり朝食をとり、ドアを開けっ放しにして、洗濯物を外のロープに干していたら、酒瓶を持った男が入ってきた。Mが“ビシビシ”

”と言って追い出した。“ビシビシ”ってどんな意味か不明。ちょっと不安になって、鍵を持っているツォゴウに電話した。昨夜が遅かったからまだ寝ているのか応答なし。

11時頃になって、「親の会」のバイヤーが来てくれた。侵入者のことを話そうとしても、通

訳のツォゴウがいないから、なかなか伝わらない。それはもう良しとし、天気が良いので、Mが片言のモンゴル語を駆使して、「私たちはまちに散歩に行きたい、5時には帰って来る」と伝えた。ふたりだけの初めての外出。ホブド5日目ともなると、言葉の不自由な私たちでも、何とかなるだろうとバイヤーは思ったのだろう。OKの許可がでた。

実はナーダム初日、こんなことがあった。県庁舎前の広場で、イベントが始まるまでの待ち時間に、私は郵便局に行こうと思った。広場から5分ほど歩いたところに郵便局があることを、事前に地図で確認してあった。Mが郵便局はモンゴル語で“ショーダン”だと教えてくれた。ひとりでも大丈夫なのに、「親の会」の男性がついてきた。「ショーダン、ショーダン」と覚えたばかりのモンゴル語を繰り返して、そ



ナーダムの競馬の騎手は子ども

(7月11日)

の方向を指さすと、彼はニコニコ笑ってうなずいて、先に立って歩きだした。でも方向が違う。角を何回か曲って、結局、広場に戻ってきてしまった。Mがなにやら身振り手振りを交えて説明してくれて、こんどはまっすぐ郵便局へ連れて行ってくれた。

ナーダムあけのまちは閑散としている。レストランも商店も公共施設も休みだ。人も車もほとんど見かけない。牛が2頭、広い道路をゆっくりと横断していった。かれらもきっと散歩中なのだろう。2日前の夜も道路を歩いている牛に出会った。モンゴルにも野良牛がいるのかと、ツォゴウに尋ねると、「どの牛も飼い主がいる、あの牛は夜遊びしているだけだ」とのことだった。

まず、サンギーン・ヘルムに行った。高さ3m、幅1.5mの清朝時代の城壁跡。18世紀中頃に建設され、寺院や家屋や墓がある城壁都市だったようだが、現在は赤土の土塁のみ残っている。

ホブドは市の中心から15分も歩くともう郊外で、住居としてのゲルがまだ残っているが、建て替えがどんどん進んでいるので、この辺りのゲルもいずれ姿を消してしまうのだろう。

ザハ(市場)も商店も郵便局も博物館も食堂もきょうは休みであることを、歩きまわって確認し、仕方なく初日に食べたボヤントホテルのレストランで遅い昼食をとった。あとは何もすることがなくなったので、センターに戻った。

昼間、まちを歩いて気づいたのだが、道路のマンホールの蓋がないところが、何か所かあった。覗いてみるとかなり深い。落ちたら骨折くらいでは済まないだろう。蓋が閉まっても、そこに足を置かない方がいいと注意された。何年か前にニュースや映画にもなったマンホールチルドレン(モンゴルのストリートチルドレン)のことが頭をよぎった。

モンゴルの冬は、首都UBで零下30℃以下になる。社会主義崩壊後、貧富の差が拡大し、混乱のなかで、住むところのない子どもたちが、マンホールで暖をとり暮らすようになった。Mに訊いてみても、「私は冬にモンゴルに来たことがないから、実際には目にしたことはない。最近耳にしなくなったが、新たな問題も発生しているようだ。地方で暮らす遊牧民が、冷害などの異常気象により、家畜が死んでしまい、生活が困難になって、都市部へ移り住むように

なり、都市人口が急増し、社会問題となっている。まちに移り住んだ遊牧民のほとんどが貧困層で、住宅を借りる資金もなく、マンホール暮らしが始まった。マンホールチルドレンから、マンホールファミリー・マンホールアダルト問題に転化しているとか…」このことを、Mの友人や「親の会」の人たちと話題にするチャンスは最後までなかった。

7月13日(金)

ボランティア初日。8:30にはリハビリ担当のサスターナが来所した。彼女はおそらく理学療法士(PT)だと思う。私たちも、そろそろ準備しようと思っていたとき、筒状のものを布にくるんで、紐でぐるぐる縛ったものを抱えた女性が、私たちの寝室に飛び込んできて、それをふとんの上に置いた。よく見ると、布の端からチラリと赤ちゃんの顔が覗いている。それを抱えてきた女性(多分赤ちゃんの母親)が、粽のようにぐるぐる巻いた紐を解くと、中から丸裸の赤ちゃんが現れた。生後1か月くらいだろうか。彼女は頻りに私たちに何か訴えているが、通訳のツォゴウはまだ来ていない。もしかして、この母子がきょうの1番目の面談者…!?

そこへ「親の会」のバイヤーがやってきた。この母子は診療室の患者さんだったのだ。内心ホッとする。それにしても、赤ちゃんが“粽巻き”なのはなぜ? Mの話によると、モンゴルでは、赤ちゃんは生後1年くらいまでは布でぐるぐる巻きにして育てるそう。昨年1月、日本で生まれたザヤの娘のスンダリもそうだったという。ザヤの母が、娘のお産からしばらくの間、日本に来て孫の世話をしていたから、“粽巻き”だったのだろうか。

9時を過ぎてもツォゴウは現れない。すでに2人の来訪者が待っている。ひとりとは肢体不自由の6歳の男子、彼は絨毯敷きの大部屋(プレールーム)で、サスターナとリハビリを始めた。もうひとりとは18歳で、今までほとんど学校に通っていなかった女子だ。きょうは祖母が彼女に付き添ってきている。とりあえず私たちはダイニングルームで、彼女と何かすることにした。紙と鉛筆を渡して、名前や年齢を書いたり、折り紙をしたり、それを紙に糊で貼ってもらい、動きを観察した。

そんなことをしているうちに、やっとツォゴウが

現れた。彼女を介していろいろ話してみると、18歳のこの少女は、幼少の頃から、ほとんど母親には関わってもらえず、昼間はずっと近くの祖母のところで過ごしている。家では手伝いらしきこともしていないようだ。自分の名前だけは書けるが、読み書きは難しい。

彼女がこれからやれることは…？「彼女は四肢には問題はない。簡単な指示は理解できる。ひとつずつ丁寧に時間をかけて、できることを増やしていけば、それが自信にも繋がるはずだ。彼女に今一番必要なのは、“居場所”だろう。毎日休まずここへ通ってくれば、何かできることがあるはずだ」というようなことをMが話した。私も同感だが、日本のように送迎バスがあるわけでないから、通ってくること自体が難しいのかとも思う。

その後は大部屋(プレールーム)に移動して、学齢前の肢体不自由児の、リハビリの様子を見学しながら、保護者の話をきいたりした。足首にどのくらいの重さのウェイトセットをつけたらよいか、スタン

ディングボックスを使って立たせてもよいものかなど、きょう会ったばかりの子に、助言するのは難しい。

午前中、一人当たり20分～30分ずつ、“面談”した。先方の話をきいたり、こちらから助言したり(それはほとんどMが担当)…。私は傍で専ら面談者の子どもと遊んでいるだけ…。初日面談者6名。

私たちが面談している間に、「親の会」の人たちが昼食の用意をしてくれていた。ダイニングの鍋には、ボーズが湯気をたてていた。中国語の包子(バオズ)が、モンゴル語ではボーズだ。ボーズの具は羊肉だけで野菜は入らない。皮は包子より餃子の皮に近い。膨らみのない蒸し肉まんといったところだ。

午後は“親の会”の人たちが用意してくれた車で、少し郊外の寺院や小高い山の展望台に登って、ホブドのまちを高いところから眺めた。昨日、酒瓶を持って入ってきた男性は、実は「親の会」のメンバーで、きょう車を用意してくれたのも彼だった。本当に失礼なことをしてしまったとお詫びした。

(次号に続く)

ぼくが見て感じたスリランカ紹介 63

スリランカ人の物差し - そのⅣ

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会
日本スリランカ文化交流協会)

前回にお約束した、お寺で行われている日曜学校の話から始めます。シンハラ語では日曜学校をDAHAM PASALA ダハンパサラと呼びます。

DAHAMは宗教または仏教を意味し、PASALAは学校を意味します。コロomboのような都市部では日曜学校に通う子供が減ってきていると言われていますが、僕の住んでいたコロomboのど真ん中では、日曜日の朝には日曜学校に向かう子供たちの姿をたくさん見ることが出来ました。先日友人に確認したところ、今でも同じだという事でした。

コロomboを離れた田舎では、仏教徒の家庭では殆どの子供を日曜学校に通わせています。日曜学校に通うのは男女を問わず就学前の子供から12歳位までで、原則としては白色の服を着て行く事になっていますが、家庭の経済的な事情があれば、何を着ても良いそうです。授業料は無料で、費用は寄付や勤労奉仕で賄われています。面白い事には、平日に通っている学校には渋々行っている子供も、日

曜学校には喜んで行くそうです。よっぽど楽しく仏教の色々な事を教えているのでしょうね。

前回話した、週末になると田舎に帰る友人の家では、日曜日の朝食は早々に済ませて、子供を近所のお寺で行われる日曜学校に送り出します。日曜学校はお寺のなかにある専用の教室で、お坊さんが先生になって午前中いっぱい行われます。

友人に聞いたところでは、授業の内容は仏陀の誕生から悟りを開くまでの歴史や、お経が伝えている事の意味、仏教を生活の中で生かす方法を学ぶそうです。この最後の生活の中で生かす方法というのが、スリランカ人の物差しを形成するのに大きな役割を持っているのではないかと、僕は思っています。つまり、大袈裟かもしれませんが慈悲や寛容の心です。スリランカ人の人なつこさ、大らかさ、自分以外の人の失敗を受け入れるところなどは、これに起因しているのではないかと思います。

余談ですが、スリランカの公立学校では高校まで

仏教の授業があるそうです。また、中学卒業時に行われる Ordinary Level Examination (普通レベルの試験) と呼ばれる全国統一試験のような試験にも宗教の科目があります。この試験の結果で普通高校に進学できるか、実業高校に進学するか、中学でおしまいなのかが決まります。スリランカでは日本以上に学歴偏重社会で高校卒業時には Advance Level Examination (進学レベル試験) があり、この結果でどのレベルの大学に進学出来るか、大学に進学出来ないかが決まります。高校の高学年になると、この試験のために塾通いする生徒がたくさんいます。

次は僕が見た、スリランカの人達のお寺での過ごし方を話しましょう。コロンボ市内にも、郊外にもたくさんのお寺がありますが、今回はコロンボ中心部からキャンディロードにそって東へ11kmほどのケラニヤという町にあるお寺での事です。ラジャマハーヴィハーラというのが正式な名称ですが、通称はケラニヤテンプルです。このお寺には、お釈迦様がスリランカに来島した時に立ち寄ったという言い伝えがあります。寺の裏側にある河にはその時にお釈迦様が沐浴したとされる場所が残されていて、今でもその場所で沐浴する人たちが賑わっています。特にポヤデーにはたくさんの方が集まります。

これまでも何度かポヤデーの事を書きましたが、今一度簡単に説明します。月に一度、満月の日をポヤデーとよんで国の祭日です。この日は、労働や飲酒を止めてお寺へ参拝する事になっています。

ケラニヤテンプルは、お釈迦様が立ち寄ったとされるお寺だけに、ポヤデーには大勢の人が集まります。お寺の周辺には、お供え物や仏花、食べ物売る屋台が林立します。境内には本当に足の踏み場もないほど人が集まり、それぞれがお供えや仏花を携えています。オイルランプの燈明が灯され、大勢の人が居るにしては本当に静かに祈りが捧げられています。

スリランカの人達の祈りの神髄はポヤデーではなく平日に見る事ができます。平日にケラニヤテンプルを訪れると、お寺の隣のバスターミナルも広場もガラーンとしています。本当に伽藍がらんです。階段を登り、寺の門で靴を脱ぎます。次に水場で足を洗っ

て境内に入ります。お寺の内部は何室かに分かれていて、其々の部屋によって違うテーマの壁画が書かれています。例えば、ある部屋はお釈迦様の生誕だったりします。また其々の部屋には仏像が置かれています。

年配の方も、若い人も、お気に入りの仏像の前に座り込んで静かに祈りを捧げます。まるで仏像と語り合っているように見えます。暫くすると庭に出てダーカバ(仏塔)の周りを何周か歩き、また部屋に戻って祈りを捧げる事を繰り返します。いつの間にか時間が流れるように過ぎて、見ている僕も敬虔な気持ちになってしまいます。この時間の流れがスリランカの物差しの基準かもしれませんね。

(次号に続く)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に‘わんりい’の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

‘わんりい’は、いつでも入会を歓迎しています。
年会費：1500円 入会金なし

*入会月によって会費は割引されます。お問合せ下さい。

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

‘わんりい’の活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。

入会されると

- ①年10回おたよりをお送りします。
- ②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

- ◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をpdfファイルでお送りします。こちらは無料です。
- ◆町田国際交流センターで、ご自由に取ることが出来ます

跑馬山観光を終え、再び地上で赤シャツと合流した次仁扎西と私は、稲城の少女といつの間にか現れたその母親も加わって5人グループとなると、最初に始めたのは今夜の宿探しだった。

とは言っても、私の宿は既に荷物を置いてきた黒帳篷ゲストハウスに決まっていたので、探したのは稲城一行の4人が泊まる宿だ。外国人目線とは一味違う、地元の人間の宿探しに同行するのはとても面白かった。

中国世界からチベットエリアへの中継点となる康定の街中には、安宿から高級？ ホテルまであらゆる宿泊施設がひしめきあっているのだが、表通りに「宿宿」の看板を掲げているような判り易い宿の他にも、裏路地やビルの間隙間に外国人の目には見えないような小さな宿が詰まっている事を彼らに同行して初めて知った。土地の人間でなければ入っていく勇気が出ないような、おんぼろビルの間隙間の宿でも、中に入れば結構な広さの快適そうな部屋があったりして、そのくせ立地の悪さからなのか、彼らと見て歩いた部屋は何処もずいぶん安い。宿探しが面倒な私は、とにかく眠れさえすれば良いと、あまりこだわらずに最初の宿に決めてしまう事が多いのだが、彼らは慎重にあちこち見て回っては、宿の女将に値下げ交渉を持ちかけたりしていた。

ああ～～、残念。こっちで皆と泊まる方が断然面白いし、宿代も安かったのになあ・・・

2人と出会って早々に、わざわざバスターミナルから遠く離れた外国人用のゲストハウスなんかにはチェックインした事が非常に悔やまれた。君もこっちに泊まればいいじゃん。私の気持ちを見越したように、赤シャツ達が言ってくれたが、時既に遅しだ。

少女と母親、赤シャツと次仁扎西で無事に2部屋分の落ち着き先を見つけると、次は街の食堂で腹ごしらえとなった。赤シャツと次仁扎西はポンポンときっぴり良く料理を注文すると、テーブルいっぱいには並べた皿を前に、さあ食べる食べる！ とさかん勧めてくれる。先ほど合流した稲城の少女は康定の学校で学んでいるのだそうだ。この日は休暇で帰っていた稲城から戻って来たところで、チベット服に身を包んだ母親は少女を康定まで送って来たとの事だった。

出会ったとたんに私を仲間に引き入れてくれた赤シャツと次仁扎西に加え、少女も彼女の母親も目が合う度にニコニコと優しく微笑み、たくさん食べてねと声をかけてくれる。次仁扎西以外のメンバーはつい先ほど知り合ったばかりだが、まるで旧知の友人と一緒に居るみたいな親しみが感じられる。

こんな風に仲間と談笑しながら食べる食事って、何て美味しいんだろう。これまでの旅の間は、その殆どを一人でボソボソと一杯の麺を啜ったりして、単に食欲を満たすだけのような食事を繰り返してきた私だ。こうして旅の最後に孤独から解放され、仲間と談笑しながら食べる食事が与えてくれる幸せをしみじみと身に染みて感じ、旅の最後にこんな食事の機会を与えてくれた神様に、心の中で感謝した。

食事の後は皆で康定の街を練り歩き、次から次へと立ち並ぶ商店を冷やかして歩いた。肩で風を切って先頭を歩く赤シャツは、洋服屋に飛び込むと、そこに掛けてあったジャケットを羽織り、大きな鏡の前でモデル張りにウォーキングを披露したかと思えば、私達が服を見ている一瞬の間に姿を消してしまい、気づけば今度は隣の床屋でケープを纏い、理容師に髪を整えさせながら鏡に向かってすましていたりして、本当に面白い奴だ。

次から次へと飛び跳ねるように康定の街を流していく彼らと一緒にいると、まるで自分がテンポの良いコメディ映画の登場人物にでもなったような気分だった。私は楽しくてずーっと笑っていた。

そんな康定散歩の合間、道端の縁石に座って、一時の休憩を取っていた時だ。赤シャツが突然真顔になって私に尋ねた。

「君は俺たちの事をどう思う？」

「え？」

「俺たちが恐いと思うかい？」

「ええ!? 全然怖くないよ。なんでそんな事聞く？」

唐突な質問に多少面食らった私が聞き返すと、赤シャツが重ねて問いかけてきた。

「会ったばかりで怖いと思わないのかい？俺たちが信じられるのか？」

「だって、いい人か悪い人かなんて直ぐわかるよ。悪い人はいっぱいいるけど、あなた達は信じられるから全然怖くない。私達は友達でしょう？」

私は笑いながら答えた。

「君は変わってるな。外国人でこんな風に俺たちと付き合う人間はいないぜ」

「だって2人はいい人だから」

「そうさ。俺たちとなら、一年一緒に居たって問題なんか起こりっこないぜ」

「うん。次に私が稲城に行った時は絶対あなた達のタクシーに乗るよ」

徐々に日が落ち、辺りが薄暗くなってくると、

「よし、今度はディスコに行こうぜ！」

赤シャツが言った。

ええ～？ まだ夕方だし、こんな時間に行くディスコって何だろう？ 半信半疑で赤シャツについていけば、目的地は街の中にある広場なのだった。

そう、この康定の街では毎日夕方になると広場のスピーカーから音楽が流れ、広場に集っている大勢の人達が一斉に踊りだすのが日課となっているのだ。特に踊りのルールなどが設けられている様子も無く、流れている音楽に合わせ、フォークダンスの様に踊るグループもあり、自己流で踊る人もあり、とにかく老若男女が入り乱れ、向い合わせで満面の笑みを浮かべながら、誰もがとても楽しそうに踊っていた。

たまたま広場のベンチで休んでいた私が初めてこのダンスに遭遇した時は、突然何が起こったかと驚いたが、その後いつ康定に行っても、この夕方のダンスは行われていた。きっとラジオ体操のような感覚なのでは？ といった感じだ。康定市民は毎日の習慣として夕方になると自然に広場に集い、街のスピーカーから音楽が鳴る一時を、ダンスを楽しみながら汗をかき日々の健康増進に努めているのではないだろうか？ と勝手に想像していた。

それにしても、踊っている人々は誰もがニコニコとなんだかとても楽しそうなのだ。人がこうやって自然に集い、毎日踊りながら暮らしている街なんて、なんて素敵なんだろう。こんな事が日々あたりまえに行われる街に住む人達が羨ましく思え、ちょっと自分も踊りの輪に加わりたような気持ちを抱えながらも、よそ者の寂しさで眺めているだけだったのが、旅の最終日にして、そんな踊りの輪に加わる事となったのだ。

仲間がいるって楽しいな・・・彼らと共に過ごせるのは今日一日だけだと思いつくと、胸の奥がキュンとした。もっと彼らと一緒にいたい。明日二人と一緒に車に乗って、また稲城に戻れたらいいのに・・・だが、いつしかとつぱりと日は暮れて、私はそろそろ自分の宿へと戻るべき時間になっていた。名残り惜しいのは山々だが、いくら引き延ばしたところで別れの時間はやってくる。どこかで気持ちに区切りをつけなければならぬのだ。ねえ、私はもう自分の宿に戻る事にしよう。私がそう切り出すと、白タクの2人は驚いたように、あんな宿まで戻る事ないさ。俺たちの部屋と一緒に泊まればいいよ。と口ぐちに引き留めた。

「だって荷物はあっちの宿に置いてあるし、明日の朝は成都に戻らなきゃならないから・・・」

「なら今夜はこっちに泊まって、明日の朝荷物を取りに行けばいい」

引き留めてくれたのは赤シャツや次仁扎西ばかりで

なく、少女の母親までもが、私達と一緒に泊まりましょう？ と熱心に声をかけてくれていた。皆が私をこんな風に仲間として受け入れてくれていた事に、少し胸が熱くなる。本心を言えばこのまま彼らとここに残って、一緒に泊まりたい気持ちでいっぱいだったが、既にこちらの宿で宿代を払っていたし、シャワーを浴びたら着替えもしたい。今日一日の汗でベトベトになったままの服で眠り、明日の朝になってから遠くの宿まで、わざわざ荷物を取りに往復するのは、ちょっとご免だ。

後ろ髪引かれる気持ちを振り切って、それを彼らに伝えると、判ったよ。だったらここから宿まで送ろうか？ と赤シャツが言ってくれた。ううん、いい。私はかぶりを振った。せっかく隠してある二人の車を出してくるのは危ないし、ここからはタクシーで帰るから大丈夫。私はそう答えると、皆と手を握り、また稲城で会おうね、と約束してお別れした。

赤シャツと次仁扎西が私の為にタクシーを拾ってくれようとして、道に乗り出した時だ。一台の車が私達の前にスッと止まって窓を開けた。

「ええええ～～～～!!」

赤シャツと次仁扎西が駆け寄って嬉しそうに話しかけている運転手の顔を見て、私も思わず歓声を上げた。

なんて事だろう。運転席で笑顔を見せていたのは、私がひと月前アロン達と亜丁に向かう際、私達を乗せたタクシーの運転手なのだ。亜丁の入場料を逃れる為に早朝のゲートを暗闇に紛れて突破し、朝日に輝く神の山と一緒に眺め、「そんなに亜丁が好きなら、この土地の男と結婚すればいい」と笑っていた彼だ。

運転手は私の顔をみるとニコリと微笑んだ。

「やあ小姐、亜丁は楽しかったかい？」

この後に及んで、まだ稲城の知り合いに会うなんて!!! チベットの神様が用意してくれた最後のサプライズ・プレゼントで、孤独な一人旅の最後の仕上げは大勢の仲間にもまれて、まるで大団円のような幕切れとなった。

その場でまたひとしきり亜丁の思い出話に花が咲き、いよいよこの場から立ち去り難く思われた私だったが、このままズルズル過ごしてしまえば後できっと後悔する事になる。今日一日の様々な出来事でだいぶ疲れてもいた私は、意を決して皆にいとまを告げた。

赤シャツが拾ってくれたタクシーに乗り込み、何度も彼らに手を振ると、車の窓から道路脇の食堂に入っていく彼らの姿が見えなくなるまで目で追った。

車を飛び下りて、彼らの後を追いかけていたい気持ちを押し殺し、本来なら旅が終わる寂しさに耐えながら、しょんぼりと孤独に過ごす事になったであろう康定最後の一日を、こんなに楽しい日にくれたチベットの神様に心から感謝した。

(次号に続く)

香港映画「桃さんの幸せ」

為我井 輝忠

久しぶりに感動的で、しかも考えさせられる映画を見ました。それは香港映画の『桃（タオ）さんのしあわせ』（原題：桃姐（A simple life））です。香港映画と言うと、どうしても派手なアクション映画を思い浮かべますが、そのアクション映画の担い手であるアンディ・ラウが今回の主演であったのは特筆すべきことです。ただ『桃さんのしあわせ』は、派手なアクション振りとは無縁のごく普通の市井の人々の物語です。

60年間、同じ家族に仕えてきたメイドの桃さん（ディニー・イップ 葉德嫻）がある日脳卒中で倒れてしまった。その日々の暮らしの中で、最低限の言葉しか交わさず、ごく当たり前身の回りの世話を任せていた雇い主の息子ロジャー（アンディ・ラウ 劉德華）は、その時初めて桃さんがかけがえのない人だったことに気が付く。

ロジャーは映画プロデューサーとしての忙しい仕事の合間を縫い、介護に奔走するが、迷惑をかけまいとする、穏やかだが芯の強い桃さん。老人を巡る社会環境の現実を目にしながらも献身的に尽くすロジャー。二人はやがて母と息子以上の絆で結ばれていくが、少しずつ老いていく桃さん……。

ストーリーはざっとこんなものです。『桃さんのしあわせ』の制作・監督は、アン・ホイ（許鞍華）は1979年、『瘋劫』で長編監督デビューし、香港ニューウェイブの旗手として注目され、さらに20本以上

の作品を監督し、様々な映画祭で受賞してきました。特に、『女人、四十。』（95年）はベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞し、彼女のテーマとする領域の本領を発揮したものと思われます。それが「老いること」、そして老いて初めて暴き出される孤独や家庭の問題等身につまされる問題に取り組んできました。

桃さんこと鐘春桃は、ディニー・イップが演じましたが、彼女は香港映画においては不可欠な女優で、この作品で彼女は中華圏の女優としてコン・リーに次いで2人目のヴェネチア国際映画祭主演女優賞に輝いています。彼女の渋みのある、いぶし銀のような演技は高峰秀子を思い出させ、私の好きな香港映画人の一人です。

今回この映画を見て、誰にも老いはやって来ること、それを誰が面倒を見るのか、身につまされる問題をいくつも身近に感じ、大いに考えさせられました。これはどの国でも起こる問題です。特に日本では、香港以上に

身に迫る問題です。私にとっても大いに考えさせられた作品でした。



* 為我井輝忠さんは、12月より、スリランカで日本語教師を務めることになりました。滞在1年の予定です。「ディープなアジア映画鑑賞」は、この間休載し、代わりにスリランカの最新情報をお寄せくださる予定です。赤岡さんのスリランカ紹介と併せて、一層スリランカという国が身近になると思います。

災害時の気持ちの備え

女性の視点から考える災害支援について、講演会にでかけた。講師は、浅野幸子さん(早稲田大学「地域社会と危機管理研究所」客員研究員ほか)。東日本大震災で、実際に女性が置かれた状況から見た課題を具体的に提示し、とても分かりやすい内容だった。

まず、女性と男性で被災経験は異なる。この認識が、第一歩。例えば、女性は避難所で洗濯物が干せず、濡れた下着を身につけることで膀胱炎や膣炎などの病気を多発。人がいる前で着替えができないなど、衛生問題が男性より厳しい状況に陥る。また、生理用品や下着など、女性に必要な支援物資が届かない(届いても、物資管理者は男性が多く、配布方法が分からない)。暗い避難所で、女性や子どもへの性的暴力の不安も。妊娠期の方、乳幼児を抱えるお母さんはさらに大変だ。一方、経済力の担い手であることが多い男性は、生活や仕事のプレッシャーで鬱状態に。復興期には、少ない人手で、溜まっていた膨大な業務をこなさなければならず、過労死も増加する。

困難は、知恵と工夫で軽減できる。例えば、女性更衣室、授乳室、女性専用洗濯物干し場の設置や、間仕切りの導入で、プライバシーは守られる。文京

区では、大学と連携して、災害時の妊産婦、乳幼児専用避難所を設置する。いざというときは、大学の校舎が妊産婦、乳幼児親子専用の避難所となる。

ただ、男女で被災経験が異なるという認識がないと、間仕切りの導入ひとつにしても、「一体感がなくなって助け合いの精神が失われる!」と、男性リーダーが反対し、見送られた事例も。女性更衣室や授乳室にしても、「場所がない」「昔は、人前でも授乳していた」など、理解がないと設置すら難しい。しんどいときだからこそ、お互いの困難を理解しあいたいところだが…。

講師の提案は、平常時から自治会でも行政でも、男女一緒になって、災害時のルールづくりを行うことで、いざというときに、そのルールが生かされるという。例えば、「授乳室・女性更衣室を設置する」というルールをあらかじめ決めておくことで、周囲の理解を得やすいというのだ。

なにより、女性であっても、そこまでの困難を想像できなかった私。ルールづくりに参画する機会は思い当たらないが、災害時にこそ、お互いの困難を理解する努力をしなければならない、という気持ちの備えをしておきたい。

(真中智子)

松本杏花さんの俳句

「千里同風」より

茶の花雄蕊の誇り慎ましや

cháhuā pǐn sè jiā
茶花品色佳

yīrán xióngruǐ guān bǎi pā
依然雄蕊冠百葩

xiūqiè zhàn yè xià
羞怯绽叶下



季语：茶花，冬。冬季开放白色的五瓣花朵，黄色的雄蕊尤为美丽，亦有红花。

赏析：寒冬的花朵应该是不畏风霜的，可为何羞答答地多在叶下绽放呢！要知道，你的雄蕊是任何花朵都相形见拙的——这对话般的俳句，将作者同大自然的亲近感表现的淋漓尽致。

凋落の美しきを願う紅葉かな

báishuāng cuī diāolíng
白霜催凋零

zhuīqiú yàn měi guān zhōngshēng
追求艳美贯终生

fēngyè hóngtóngtóng
枫叶红彤彤

季语：枫叶，秋。

赏析：我国元朝杨显之曾写下“黄花金兽眼，红叶火龙鳞”来形容菊花和枫叶，神韵十足。以前译者只知道用玉龙败甲比作飞雪，当看了杨诗后再译松本女士的这首俳句，便感悟到用火龙鳞比作凋零的红叶之美了。

此首俳句视觉上艳丽明快，又用了拟人化描写，飘飘洒洒，妙趣横生。

【留学生たちの広場】

東北被災地支援のボランティアをして

し おん
国士舘大学 2年 施 恩

私は留学生として、日本の社会に貢献したい、私の力は微力ですが、無力ではありません。みんなの力を合わせれば、何でも乗り越えられると思います。東北がんばろう！日本がんばろう！そんな気持ちから東北震災復興支援にも貢献したいと思っていました。

そしてNPO法人アジア・コミュニティ・センター21 (ACC21)¹⁾の呼び掛けで、現地協力団体・NPO法人ジェン²⁾と共に、私は東日本大震災被災地支援活動に参加しました。呼び掛けのポスターには「ボランティアを通じて、あなたの国と日本の“架け橋”になりませんか」という言葉が書かれてありました。私はその言葉について深く考えました。

自分の国と日本の“架け橋”になるためには、何を為し、どんなを努力をすべきなのか？私は色々考えましたがなかなか正確な答えが見つけれませんでした。私の考えでは、両国に“架け橋”が架かるということは両国がもっと仲良くすることです。どうやって仲良くするのかというのは、お互いをよく知り、そして尊敬あい理解し合うことなどが必要です。

そのために、交流したり、勉強したり、メディアなどから正しい情報を得ること、また、東北支援のボランティア活動のように、みんなと共に汗を流すことが必要です。言葉の障害は問題ではありません、みんなの「心」と「心」の交流だと思っています。

以下、三つの点で東北ボランティア体験を話します。

1) ボランティアをすることの喜びと励み

東日本大震災の被災者たちは、遠方から来て暑い中で作業してくれたことへの感謝の気持ちから、自分たちの得意料理や冷たいお茶でもてなしてくれ、船に乗る体験などを用意して待っていてくれました。手作りのご馳走には、日本人が相手を思いやる気持ちが込められていて、日本人の心を感じました。

被災者の皆さんは今回の被災で私たちが体験していない厳しい体験をしました。だから、私たちは笑顔で被災者たちの歓迎の気持ちに応えて、元気や勇気などをあげたい。喜んでくれる相手がいるからこそ、がんばりたいという気持ちが強くなります。私たちが、ボランティアをした、宮城県石巻市の狐崎浜に来て、浜は賑やかになりました。笑声が響き、地元には活気が戻りました。そして、被災地の「地域活性化」のために、私は地元がもっと

と盛り上がるようにしたいと思いました。

2) 交流

いろいろな国からの留学生同士の交流、地元の被災者との交流、NPO法人ジェンのスタッフや一般参加者の交流、全体の交流。活動した三日間で、山ほど交流しました。いろいろな言語を使って交流しました。いろいろな文化や考え方の違いも知って、異文化体験もしました。交流を通じて、国と国の距離が近くなりました。

「留学生のパワーは強いね」と地元の方は方言のなまりが入る言葉を話しながら笑顔で接してくれました。やさしく満面笑顔のおばあさんとおじいさん、みんな、かわいくかっこよかったです。今も地域の人たちの声やボランティアの皆の声が頭の中に浮かんできます。忘れられない素晴らしい思い出になりました。

3) 絆

ボランティア体験の最終日、一人一人、一言を言いました。ヴィさん(ベトナムの方)は、ボランティアをした地元がとても好きになって、もっとこの地で支援活動を続けたいと強く感じていると語りました。

私は今回のプロジェクトに参加したことで、この東北支援活動を企画し私たちに呼びかけてくれたNPOACC21と受け皿となってくれたNPOジェンの2団体の皆さんとの「絆」、参加者同士の「絆」、地元との「絆」、私たちの国と日本との「絆」など、沢山の「絆」で結ばれたことを感じました。

最後ですが、ボランティア活動で大切なのは「楽しむ」ことです。「楽しむ」ことは人生の宝物だと思います。小さい「楽しむ」でも、一日元気になれます、相手にも元気を与えることができます。被災地支援のボランティア活動に参加できたことは、私にとって、大きな成長をもたらしてくれたと思います。作業は疲れるけれど、機会があれば、ぜひ、もう一度頑張りたいと思います。

◆ 註

1) NPO法人ACC21

アジアの現地NGOとの幅広いネットワークを基盤に、アジアの貧困削減の実現に向け活動する国際協力NGO。アジアの人々が共に生き、支え合う、世界に開かれた、公正で平和な社会の構築をビジョンとして活動している。

<http://acc21.org/>

2) NPO法人ジェン

紛争や災害により厳しい生活を余儀なくされている人々が、自らの力と地域の力を最大限に活かして、精神的にも経済的にも自立した生活を取り戻すための支援を世界各地で行う。その活動の一環として、東日本大震災支援活動を行っている。

<http://www.jen-npo.org/>

中国の笑い話Ⅳ（「365夜笑話」より）

第13話：どっちみち（歯は）生え替わるんだから

「なあ君、こんな馬鹿げた話、笑っちゃうよな！」

※（中国語で、他人の様子を見て大笑いすることを『笑掉大牙（笑って歯を失う）』と言う）

電話で友達と話している兄の話聞いていた小さな妹は、急いでおばあさんの所へ行って、言った。

「おばあちゃん、私、もう絶対に笑わないから！」

「どうしたの？ どうしてそんなこと言うの？」

「私、歯がなくなってしまうのは嫌なもの」

「大丈夫。あんたの歯はこれから抜け替わるんだから」

第14話：歯

真夏のある日、カレンは乳母車に小さい弟を乗せて、散歩に出かけた。マイクが一緒について来た。暑い日だったので、マイクは裸足だった。

「あんた、どうしたの？ お父さんが靴職人なのに、何故靴を履いてないの？」

カレンに言われたマイクは言い返した。

「君のお父さんは歯医者なのに、君の弟は歯が一本もないじゃないか。どうしたのさ！」

（翻訳：有為楠君代）

《'わんりい' 掲示板》

◆わんりいの催し

第15回 中国語で読む・漢詩の会

よく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう！
正しい発音で読めるように練習しよう！ 漢詩の時代的背景や詩に描かれている情景を知って漢詩を一層楽しもう！



▲場所：町田市民フォーラム・4F、第二学習室A
いつもと会場が異なります。お間違えのないようにお出掛け下さい

▲月日：2012年12月16日（日）

▲時間：10：00～11：30（講座は午前です）

▲講師：植田渥雄先生（現桜美林大学孔子学院講師）

▲会費：1500円 ▲定員：20名

* 録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆2013年1月の予定：1月13日（日）

於：まちだ中央公民館・視聴覚室

◆申込み：☎050-1531-8622（わんりい）

E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp

◆わんりいの催し

ボイストレーニングをして 日本の歌を美しく歌おう！ Vol.4

ボイストレーニングをして、日本人が長い間、親しんだ童謡や抒情歌などの愛唱歌を気持ちよく歌いましょう。



◆動きやすい服装でご参加ください

▲2012年12月11日（火）

10：15～11：45

▲場所：まちだ中央公民館・6F視聴覚室

▲練習予定歌「ペチカ」「四季の歌」

▲講師：Emme（歌手）

東京芸術大学邦楽科長唄別科卒業。日本の伝統音楽・長唄の素養をバックにした、たおやかなオリエンタルヴォイスの独自の歌のスタイルを誕生させている。

▲会費：1500円（会場使用料・講師謝礼など）

▲定員：15名（原則として）

◆2013年1月予定：1月29日（火）

10：15～11：45

於：まちだ中央公民館・視聴覚室

●申込み：わんりい ☎042-734-5100

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

恒例！ 'わんりい' 新年会日取り決定！！

!!! 2013 'わんりい' 新年会・シュワンヤンロウで新年を祝おう !!!

場所：麻生市民館・料理室（小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内）

2012年2月10日（日） 11：00～14：00

●定員：先着40名（'わんりい' 会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい）

●参加費：1500円（会場費 シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入）

●申込：メール：wanli@jcom.home.ne.jp TEL/FAX：042-734-5100



第2回 海老名ニューイヤーコンサート

日米で活躍の崔宗宝、崔宗順&森麻季(ソプラノ)が贈る新春の慶び

司会：青島広志
ゲスト：林敏(揚琴)



2013年1月6日(日)

18:00開演

海老名市文化会館・大ホール

- 参加費：S席：4,500円、A席：3,500円
(当日券は、プラス500円) 全席指定席
- 問合せ&申込：046-240-0836(崔宗宝音楽事務所)

主催：崔宗宝音楽事務所 / 神奈川中央新聞社「リベルタ」

スリランカ事情講演会

現在、スリランカで日本語を教えている鈴木睦さん(町田市出身)が12月に一時帰国します。現在のスリランカの姿を知ってほしいと、表記の講演会を企画しました。ぜひご参加ください。

- 日 時：12月8日(土) 18:30～20:30
- 場 所：町田市民フォーラム4階第一学習室A
- 参加費：無料 ◆聴講希望の方は直接会場へ
- 主 催：日本スリランカ文化交流協会
☎042-735-9583
E-mail:brb35673@nifty.com

中国を知る会・2013年1月例会

「中国最新事情」

- お話：竹口哲氏

長年IT企業に関わり、退職後は、中国の大学・企業人との交流を推進している竹口氏を迎え、復旦大学及び高速鉄道事情など最新の中国の動向をお話しいただきます。

- 日 時：1月21日(月) 18:10～20:00
- 場 所：町田中央公民館 視聴覚室(定員36名)
- 参加費：無料
*20:10～懇親会 徳樹庵(希望者のみ)
*懇親会参加者は別途3000円(飲み物代込)
- ◆申込み：床呂英一

Eメール m-tokoro@mta.biglobe.ne.jp

※メール対応が不可の方は、FAXで田井が申し込みを受けます。FAX:042-734-5100

[12月の定例会及び2013年新年号‘わりりい’発送日]

- ◆定例会：12月7日(月) 13:30～ (田井宅)
- ◆新年号の発送日：12月28日(金) 13:30～(田井宅)

ジャン シャオチンコンサート2012

～心に響く古箏の調べ～

2012年12月23日(祝)

14:30(開場：14:00)

日仏文化協会 汐留ホール

東京都港区東新橋1-7-2
汐留メディアタワーアネック1F



- 参加費：全席自由 3,000円
- 問合せ&申込申し込み・お問い合わせ：
TEL：080-1304-7347(村山) FAX：045-313-5188

主催：姜小青フレンドリーコンサート実行委員会

和光大学レクチャーコンサート2012

2台のアコーディオンによる音楽世界旅行

鍵盤式アコーディオン(藤野由佳)とボタン式クロマティック・アコーディオン(安西創)の演奏を聴き、2台のアコーディオンで奏でられる世界各地の音楽を生演奏の迫力でお楽しみください。

- 2012年12月21日(金)
- 18:30～20:30(途中休憩有り)
- 町田市文化施設和光大学ポプリホール鶴川
- 参 加：500円
- ◆問い合わせ：☎044-988-1433(和光大学企画広報係)
- ◆申込方法：「レクチャーコンサート2012」と明記し、①氏名(フリガナ)、②〒・住所、③電話番号を、必ず記入の上、12月14日(金)までに、下記和光大学企画広報係まで申し込む。
☎044-988-1433 FAX：044-988-1594
E-mail: open@wako.ac.jp

【‘わりりい’の原稿を募集しています】

‘わりりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。中国で体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又‘わりりい’に掲載の記事などについても簡単な感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル ‘わりりい’

【編集後記】 今年には市による助成事業の成果で、多くの留学生と交流できました。夢を膨らませて日本に留学してきた若者たちはどの若者も真っ直ぐで、‘わりりい’の活動に力を与えてくれました。忙しくはありましたが幸せな年であったと改めて感謝の日々です。(田井)